

Browning 夫妻の愛の詩：
Sonnets from the Portuguese と
“One Word More”

野 口 忠 男

- I はじめに
- II E. B. Browning: *Sonnets from the Portuguese*——“Not Death, but Love”
- III R. Browning: “One Word More”——“lights and darks”
- IV おわりに

I はじめに

Elizabeth Barrett Browning の愛の詩 *Sonnets from the Portuguese* (1847) と Robert Browning の愛の詩 “One Word More” (1855) を読む上で、二人の出会いから結婚に到るいきさつについて考えておくことは意義深いことである。

1844年2度目のイタリア旅行から帰った Robert は、John Kenyon から妹 Sarianna に贈られた Elizabeth の2巻から成る詩集 *Poems* をひもといていた。その中の “Lady Geraldine’s Courtship” と題する詩の一節に於て、Browning の詩が Wordsworth や Tennyson と同列に取り扱われていたのである。

Or at times a modern volume, Wordsworth’s solemn-thoughted idyl,

Howitt's ballad-verse, or Tennyson's enchanted reverie,——
Or from Browning some "Pomegranate," which, if cut deep down
the middle,
Shows a heart within blood-tinctured, of a veined humanity. (1)

あるいは時々 現代の詩では、ワーズワースのおごそかな思想の語られている田園詩、
ホイットのパラッド、または テニソンの魅惑的な夢想詩——
あるいは ブラウニングからは「ざくろ」のあるもの、それは、仮
にその真中を深く割ったなら、血がにじみ 脈打つ人間味のする 心
臓を見せてくれる。

詩人としての前途に失望していた Robert は、彼女のこの一節から強い感
激を得たのであった。彼は John Kenyon にすすめられて、1845年1月10
日付で、彼女に熱烈な手紙を書くのである。

I love your verses with all my heart, dear Miss Barrett, ...I do,
as I say, love these books with all my heart ——and I love you
too. (2)

親愛なるバレット様、私は全心でもってあなたの詩を愛します。…
お話したように、私は本当に心からこれらの詩集を愛しています—
—それにあなたも愛しています。

この時から、世に比類のない真実なる愛の手紙が、翌年の9月19日まで
ほとんど毎日のように取り交されたのである。1845年1月、Robert は、
彼女の詩才の優れていることを賞賛し、面会を申し込んだのである。し
かし彼女は、憂うつな日々を送っていた病弱な身の上であったので、断
つたのである。私達は彼女の心身の病について特に注意しておく必要が
ある。Herefordshire の立派な田舎の屋敷“Hope End”に住んでいた幼
少女時代は、“sensitive”で“active”で“courageous” (3) な普通の健康
体であり、幸福な生活をしていたのである。しかし、15歳のある日、落

Browning 夫妻の愛の詩：
Sonnets from the Portuguese と “One Word More”

馬して脊椎骨をいため、それから不自由な生活を送る悲愴な運命を背負うことになる。1828年母親がなくなり、財政上の損失で “Hope End” を人手に渡し Sidmouth 続いて London へと移ったのである。1838年 Elizabeth は肺をわずらい、医師 Dr. Chambers のすすめを受け、おぼのいる南の Torquay へ転地療養に出かけた。しかし1840年7月、彼女が最も愛した二歳年下の弟 Edward が、Babbacombe Bay でボートに乗ったまま溺死するという不慮の出来事が起きたのである。彼女は、脊椎と肺の病苦、母の死それに弟の死で、肉体的にも精神的にも深い悲しみに沈んでしまい、冬の間はほとんど暗い二階の部屋に閉じこもり、詩作と読書に唯一の楽しみを見い出していたのである。彼女の病気に関して G. K. Chesterton は次のように述べている。

She was an invalid, and an invalid of a somewhat unique kind, and living beyond all question under very unique circumstances.⁽⁴⁾

彼女は病弱であった、それも何か特殊な病気であり、疑問の余地なく、とても変った環境のもとに住んでいたのである。

Elizabeth がついに彼の面会を承知したのは、4 カ月後の5月21日のことであった。二人が初めて会見した時にはすでに20通の手紙が取り交されていた。それらは、詩に対する情熱と宗教的な固い信仰と自由であり、人間的な同情にあふれたものであった。Robert は表情に富んだ眼と鋭敏な唇、銀鈴のような音楽的な声と敏捷な動作をした健康な体の持主であった。彼は一人の小柄な女性が、巻毛に蔽われて青ざめた顔ををし、大きな印象的な目つきで、ソファに横たわっているのを見たのである。彼女は一人の良き友を得たに過ぎないと考えていた。しかし彼は、すでに恋愛の感情を強く抱き、かけがえのない魂を見いだしたと思ったのである。彼は己の一生をこの女流詩人のためにすべて捧げようと固い決意をしたのである。

彼らの交際は、詩人同志として、作詩の技巧や詩の草稿の交換や共同の創作を考えたりダンテを論じたりしたのである。彼らの友情と信愛の情は、詩を越えて一層人間的な個人的な関係に日増に発展していったの

である。Robert の気高く情熱的な魂から流れ出る誠真の愛に触れてからは、Elizabeth の絶望的に思われていた健康が、徐々に回復して来たのである。肉体的に不可能と思われていたことも少し出来るようになり、閉じ込められた暗い部屋から出て、彼に会いたいと願うのであった。医師は彼女に転地療養を奨めるのであった。しかし彼女の大好きな父は、親切で、優しく、冗談を交えるところがある反面、独断的で、頑固で、自分の主張は絶対に曲げないところがあった。⁽⁵⁾彼には病弱な娘を結婚させるといった考えは毛頭なかったし、自分の娘が死にかけていると決めこんでさえいたのである。

1846年9月12日、Elizabeth はついに愛する父に逆って、家から近い Marylebone 教会で結婚式を挙げたのである。式後、彼女は家に戻り、一週間後に愛犬 Flush と忠実な女中 Wilson だけをつれて、家族の者が食事中にこっそり家を出たのである。二人の行く先はイタリアであった。Pen が生れて後、Florence の Casa Guidi に住んでいたある春の日、Elizabeth は夫が朝食をすませて窓辺に立っていたところへ背後から忍び寄り、恥じらい気味に一つの包みを彼の手へ渡して言ったのである。“She told him to read that, and to tear it up if he did not like it” (「彼女は彼にそれを読み、もし面白くないようならば、破り棄てて下さいと語った。’)彼女はすぐに自分の部屋へ逃げ帰ったと伝えられている。それが不滅の愛のソネットと言われる *Sonnets from the Portuguese* である。彼女によってつけられた詩の題名は、*Sonnets translated from the Bosnian* とされていた。Robert は愛していた彼女の初期の恋愛詩“Catarina to Camoëns”に因んで *Sonnets from the Portuguese* の題名を奨めたのである。Camoëns とは、ポルトガル最大の叙情詩人である Luis Vas de Camoëns (1524—1580) のことである。彼は彼女のことを“little Portuguese”と愛称で呼んでいたのである。この詩集を読み終えた後、Robert は“The finest sonnets written in any language since Shakespeare” (「シェイクスピア以来あらゆる言葉で書かれたうちで最も素晴らしいソネット’)と賛辞を惜しまなかったと言われている。彼女はこの詩を二人の間にだけ大切に秘めておきたかったのである。しかし Robert の強い奨めによってついに出版することを決意したのである。

Sonnets from the Portuguese はまさに “Love and poetic genius

Browning 夫妻の愛の詩：
Sonnets from the Portuguese と “One Word More”

together have reconstituted this Realism into an undying Word”⁽⁷⁾
（「愛と詩的才能が一つになってこの現実を不滅な言葉に再統合している。」）
のである。Robert の全人格的な与える愛，C. S. Lewis の言葉によれば
“Gift-love” に対する彼女の深い感謝の表現である。彼の愛が彼女の人格の最も深くに浸透し，死から生へ甦り，さらに創造の愛に到る複雑微妙な心の軌跡である。そこで私達は，彼女の心の内奥に演じられる，死と愛の対立と生成の過程をたどりながら，愛に於る創造の意味について考えてみたい。

II E. B. Browning: *Sonnets from the Portuguese*
— “Not Death, but Love”

(1)

I thought once how Theocritus had sung
Of the sweet years, the dear and wished-for years,
Who each one in a gracious hand appears
To bear a gift for mortals, old or young:
And, as I mused it in his antique tongue,
I saw, in gradual vision through my tears,
The sweet, sad years, the melancholy years,
Those of my own life, who by turns had flung
A shadow across me. Straightway I was 'ware,
So weeping, how a mystic Shape did move
Behind me, and drew me backward by the hair;
And a voice said in mastery, while I strove,—
“Guess now who holds thee?” — “Death,” I said. But, there,
The silver answer rang,— “Not Death, but Love.”

(1)

私がかつてセイオクリタスが あの楽しい年月，心から待ち望む年

月について、

すべての者に、年老いた者にも若い者にも、恵み深い手に贈物をたずさえ現われる それぞれの年月について、

どのように歌っていたかを考えたことがあるのです。

彼が 古い言葉で歌った詩をじっと考えていると、

あふれる涙のおうに 少しずつ幻影がつくられ、

楽しく悲しい年月、憂うつな年月、私の人生のこれらの年月が、かわるがわる現われては 私の心の中に影を投げかけていたのが見えたのです。

私はすぐにはわかったのです。こうして 泣き濡れていると、不思議な姿をしたものが 私の背後で動き、

髪をつかんで私をうしろへ引き寄せたのです。

そこで 私がもがいていたら、ある声が勝誇った調子で言ったのです——

「今 あなたをとらえている者は誰だと思うか？」——「死です」と私は答えたのです。

しかし、そこで 銀鈴のような返答の音が響いたのです——「死ではなく、愛」と。

ギリシアの詩人セイオクリタスの希望に満ちた春の歌——彼女の悲しい憂うつな絶望の日々——絶望のどん底で死の影におびえる彼女——死ではなく愛と告げる銀鈴のような声、これらは、彼女が今まで生きて来た人生の軌跡と Robert との出会いをみごとに描写し、将来彼女が歩むべき方向を暗示しているものと言える。ギリシアの文学に深く親しんで来た Elizabeth らしく、セイオクリタスの歌と言うのは、彼の *Idyl* XV にみられるアドニス (Adonis) の甦りの賛歌なのである。⁽⁶⁾春の時は、恵み深い手に一杯の贈物をたずさえ、生きとし生けるものすべてに訪れるのである。厳しい冬を耐えた後の春の訪れは、生の復活と愛の喜びをもたらしてくれるものである。彼女もこの意味に於て春を待ち望んでいたと思われる。しかし、肉体的に精神的に深く苦悩している彼女には、希望に満ちた春の到来はとても期待出来ないのである。春の到来を思えば思うほど、彼女の心は悲しい憂うつな暗闇の中へ沈んで行くのである。

Browning 夫妻の愛の詩：
Sonnets from the Portuguese と “One Word More”

彼女は絶望のどん底で死の影におびえているのである。“a mystic Shape”（「ある不思議な影」）が “drew me backward by the hair”（「髪をつかんで私をうしろへ引き寄せた」）というこの表現もまた、ギリシアの文学からの引用である。⁽⁹⁾女神アテナ（Athene）が、“Mystic Shape”で若き英雄アキレス（Achilles）の後髪を引き、アガメムノン（Agamemnon）に対する激しい怒りをとどめさせたと言うホーマー（Homer）の *Iliad* が下敷にされているのである。Elizabeth は、女神の出現によって絶望の淵から救われる日が来るかも知れないと、ここでもひそかな希望を抱いているのである。

ところで闇の世界にひそみ、後髪を引く不思議な影とは、そもそもいかなるものであろうか。ソネットの中では、次の様な表現が見られる。

…… the dreadful outer brink
Of obvious death, …

(VII, ll. 4-5)

(はっきりと目に見える死の恐しい淵)

…… amid the darkness greeted
By a doubtful spirit-voice, …

(XXI, ll. 7-8)

(あやしい悪霊のささやく暗闇の中で)

S. T. Coleridge は *The Ancient Mariner* の中で幽霊船上に現われる死神について語っている。P. B. Shelley も *Alastor* の最終部で、死神にとらえられ、深い闇の底に呑み込まれて行くことについて述べている。

A restless impulse urged him to embark
And meet lone Death on the drear ocean's waste ;⁽¹⁰⁾

(不安な衝動にかり立てられ、彼はわびしい大海の荒地にいる孤独な死に出会った。)

Robert も自伝的な処女作 *Pauline* の中で、*Alastor* の「詩人」のように、暗黒の淵に落ち込み苦悩しているのである。

I was a fiend in darkness chained for ever
Within some ocean-cave ; (11)

(私はある大海の洞窟に永遠に鎖でつながれた暗闇の中の悪魔であった。)

これらから推測して、人間が異常な精神状態に陥っている時に無意識の深海に出没し、人間を死の深淵へ引き込む怪しい死神の影であると思われる。彼女の苦悩がいかに深く深刻なものであったかがよく理解出来るのである。Robert も若い頃似た体験をしていることから、彼女の死の影の意味を深いところから理解し、強い共感を示し得たものと思われる。

セイオクリタスの詩とアキレスの故事さらに絶望の淵に現れる死の影と Robert の説く愛との関係は、いかなる意味があるのであろうか。これは、ギリシア詩の精神つまりアドニスの甦りと女神アテネの神の力対 Robert で代表されるキリスト教の神の愛 Agape の対立から移行への関係として読むことが出来る。*Sonnets from the Portuguese* に於て、死の影で代表される暗いイメージ群と Robert の愛で代表される明るいイメージ群の発展的な対立は、最終的に対立と生成を通して統合へ向かう上で、重要な働きをなしているものである。また統合への指向性が Elizabeth 特有のものであることも意義深いことなのである。私達は彼女の魂が彼の愛を得て、死と愛の対立及び生成を通して統合へ到る過程を、最後まで辛抱強く待たなければならないのである。このことについては、後で触れることになる。

第 I 歌に於て、Elizabeth は、神の愛にも等しい彼の愛を発見し、驚きと喜びを感じたのである。しかし第 II 歌に於て、彼女は神が二人の愛を禁じていると言う強い罪の意識を抱き、とても愛されるに値しない人間であると執拗に訴えるのである。

ここで興味あることは、彼女が閉ざされた暗い小さな世界にいることである。開かれた世界にいる Robert と閉ざされた家の中にいる Elizabeth

Browning 夫妻の愛の詩：
Sonnets from the Portuguese と “One Word More”

の対比が考えられる。シスピーとピラマスのように、二人を隔てているものは、“the lattice-lights”「格子窓のあかり」(III, l. 10), “this house's latch”「この家のかけがね」(IV, l. 5), “my door”「私の戸口」(IV, l. 8), “the casement broken”「こわされた開き窓」(IV, l. 9) “the threshold of my door”「私の戸口の入口」(VI, l. 3), “the wall” 壁」(VIII, l. 4) である。彼女はこの障壁によって完全に外界から遮断され、屋根裏には “bats”「こうもり」や “owlets”「小ふくろう」が住む荒れはてた暗い世界なのである。ちなみに「こうもり」や「ふくろう」のイメージを考えて見ると、前者には悪魔の意味があり、後者には、暗闇と関連して死や絶望の意味がみられるのである。(12)

The bats and owlets builders in the roof!

(IV, l. 10)

(屋根裏にはこうもりと小ふくろうの建築家たち)

“To Flush, My Dog” の中で、愛犬に向かって部屋に閉じ込められている生活を次のように歌っている。

This dog watched beside a bed
Day and night unwearied,
Watched within a curtained room
Where no sunbeam brake the gloom
Round the sick and dreary.(13)

この犬は 日夜あきずに
ベットのそばで見つめていた、
光線が差し込まず 暗いカーテンのしまった部屋で
病気でもの悲しい人の回りで 見つめていた。

Betty Miller は、病気の彼女を “a woman darkened by deprivation and suffering: a frail woman bowed, …under the burden of an omnipresent grief” (14) (「喪失と苦悩のために、陰うつになっている女性、頭を垂

れた弱々しい女性…すべて深い悲しみの重圧の下で)」と描いている。すでに見て来たように長い病苦の閉ざされた部屋の中で、彼女の孤独な心を慰めてくれたものは、読書と詩作であったのである。

第II歌から第IV歌に於て、Robert と Elizabeth の対比をなしている主要なイメージを考えてみたい。Robert は、“princely Heart”「王子のように気高い心」(III, l. 1)、宮廷に召され“chief musician”「音楽家の主役」(III, l. 9)を務める方、“The chrism is on thine head”「聖なる油は、あなたの頭に注がれる」(III, l. 13)、“Most gracious singer of high poems”「崇高な詩を歌うまことに気高い歌手」(IV, l. 2)と描かれ、それに反して彼女は“A poor, tired, wandering singer”「あわれな、疲れはてた、さ迷える歌手」(III, l. 11)、“on mine, the dew”「私の頭には、露が注がれる」(III, l. 13)と歌っている。宮廷詩人 Robert と吟遊詩人、気高さと卑しさ、貴と賤の対立で描いているのである。

この閉ざされた部屋と開かれた世界をつなぐものが、彼の誠実な愛の手紙であった。Robert の深い願いは、彼女を固く閉ざしている障壁を破り、彼の真摯な愛を彼女の魂に浸透させ、彼女が深いところでいやされ、変革されることであった。二人を隔てている障害は、第IX歌まで続き、それ以降は消えて行くのである。

(2)

第V歌に至って注目すべき点は、弟オレステス (Orestes) の骨壺を抱くエレクトラ (Electra) のイメージを用いながら、彼女は自分の“heavy heart”「重たい心」(V, l. 1)について語る。彼女は思いあまって、彼の前に重い心の灰“the ashes” (V, l. 4)をぶちまけてしまう。このヒステリックな行為の暗示するところは、Robert に深い悲しみの心を理解してほしいと望む切なる訴えと甘えであり、ひいては死から生への救済を求める思いあまった愛の表現なのである。

多くの深い悲しみが秘められているこの壺の中に、生命を暗示する“the red wild sparkles”「赤く激しい火の粉」(V, l. 6)が、灰色の薄暗がりの中で、ほんやりとくすぶっているのが認められたのである。この“the red wild sparkles”は、重要なイメージである。なぜなら深い闇で覆われ、すっかり消えてしまったかに見えた灰の中に、かすかな生命の火が

Browning 夫妻の愛の詩：
Sonnets from the Portuguese と “One Word More”

くすぶっていたからである。ここでも “a great heap of grief” 「深い悲しみの大きな山」(V, l. 5) と “the red wild sparkles” の対比が認められる。この対比はさらに発展して行くものである。

“the red wild sparkles” の “red” と “wild” の形容辞は、何を意味しているのであろうか。“red” は、“love, passion, emotions, devotion” 「愛、情熱、情念、献身」を表わし、さらに “charity and innocent virginity” 「慈愛や無垢な処女性」を意味するものである。⁽¹⁵⁾ 一方 “wild” は、激しく熱狂的な情念を暗示するものである。とすると、“red” と “wild” によって語られる内容は、激しい情念を秘めた生命と言えるものなのである。彼女はこのことを意識した上で、次のように語って行くのである。

Robert が、仮に軽蔑してこの火の粉をふみつぶしてしまったなら、たちまち火の粉は消えてしまい後には、闇が残るだけである。しかし、彼が彼女の傍で、灰色のちりを燃えたたせる風を辛抱強く待っていてくれたら、やがて火の粉は燃え立つと彼に語るのである。ここに到って、Elizabeth は彼に少し心を開いて見せることによって、二人の愛の可能性をほのめかしている。しかし彼女はこれとは逆の感情を抱くのである。この「赤い火の粉」が燃えはじめると、詩人としての栄冠を無きものにしてしまうと恐れるのである。彼女は、女性の本能として、彼女の中に燃えはじめた「赤い火の粉」の強さ、激しさ、狂おしさを直感している。これが、彼を飲み込み、詩人としての生命を奪い取ってしまう女性の大地性であることも感知しているのである。しかし、この「赤い火の粉」は、彼女の生命の活動の原点をなすものであり、彼女の創造の源泉に深くかかわるものであるために、燃え立たせても消し去ることは許されないのである。

第VI, VII歌に於て、彼女は自分のもとから立ち去ってくれることを切に願いながらも、彼をいとしく思うアンビバレンスな感情が強く歌われている。それとともに、彼女の意識されない心の深いところで、「赤い火の粉」は、彼の気高い愛を受け入れ、徐々にではあるが燃え出す準備を着実にしているのが読み取れるのである。

The widest land
Doom takes to part us, leaves thy heart in mine

With pulses that beat double.

(VI, ll. 8-10)

たとえこの広い大地に
私達二人を引き離す運命があっても
あなたの心は私の心の中で激しく鼓動しているのです。

The face of all the world is changed, I think,
Since first I heard the footsteps of thy soul
Move still, oh, still, beside me, as they stole
Betwixt me and the dreadful outer brink
Of obvious death, where I, who thought to sink,
Was caught up into love, and taught the whole
Of life in a new rhythm.

(VII, ll. 1-7)

全世界の表面が変わったように、私には思えるのです。
あなたの魂の足音が、私のもとへ、そっと、ああ、そっと私と は
つきり見える死の恐しいふちの間を 通り抜けるように、近づいて
来るのをはじめて聞いた時から。
死の淵に沈んで行くように思えた私は 愛にまで引き上げられ、生
のすべてを 新しいリズムの中で教えられたのです。

第 VIII, IX 歌に於ても、高貴な Robert と卑しい Elizabeth の対立は依然見られるけれども、彼女の心の中には、彼の愛に対して応えて行く意志が芽ばえて来ているのである。

I will not soil thy purple with my dust,
Nor breathe my poison on thy Venice-glass,
Nor give thee any love—which were unjust.

(IX, ll. 11-3)

私のちりで、あなたの高貴さを汚したくはありません、

Browning 夫妻の愛の詩：
Sonnets from the Portuguese と “One Word More”

あなたのベニスグラスに 私の毒を吹きかけたくないのです。
あなたにいかなる愛も与えられないのです—この愛は誠実なもの
ではないのです。

(3)

Robert の熱烈な至純の全人格的愛を喜びととまどい、期待と不安の微妙な動揺の中で育んできた Elizabeth の心に、ついに大きな変化が生じる時が来るのである。第 I 歌の “Not Death, but Love”, 第 V 歌の生命を暗示する “the red wild sparkles” についての心の奥深いところからの変化である。彼女は彼の愛への態度を次のように述べている。

Yet, love, mere love, is beautiful indeed
And worthy of acceptation. (X, ll. 1-2)

なお、愛、純粋な愛は、まことに美しく、
受け入れゆ価値があるものです。

彼女はここで意識して彼の純粋な愛を受け入れている。このことによつて、彼女の生命の火は、「赤い火の粉」から、赤々と燃える火に変わり、魂を宿す心の神殿を燃やし、あるいは、神殿にささげる灯心を燃やすことになるのである。そして、清らかな一すじの光が、木切れや雑草の中から立ちのぼる炎の中で、踊っている心の世界が描かれる。Browning は、“Love is best”⁽¹⁶⁾ 「愛は最高のもの」、 “Love is all”⁽¹⁷⁾ 「愛はすべてである」と、愛を抽象化して観念的に述べている。しかし彼女は、“love is fire” 「愛は火」と火の鮮烈なイメージをもって語っている。二人の愛の捕え方は、愛に対する二人の最も大きな相違を語っていると言える。この問題は、後で考えて見ることにしたい。

「火なる愛」を感じた彼女は、彼に向つてついに “I love you” (X, l. 6) と語る。今や彼女は深いところで全人格的に変革し、今度は Robert に対して “the new rays” 「新しい光明」 (X, l. 8) が発するのを意識するに至るのである。彼女の本来の願いは、与える愛を志向しているのである。そこで彼女は、愛について次のように歌っている。

There's nothing low
In love, when love the lowest: meanest creatures
Who love God, God accepts while loving so.

(X, ll. 9-11)

最も卑しい者が愛する時 愛には低いということはないのです。
神は 神を愛する最も卑劣な人間をも 彼らが深く愛している間は
受け入れて下さるのです。

第II歌に於て、神の怒りと罰を恐れた彼女が、ここで神の広い愛 Agape
を確信している。この神の考え方は、Browningの考え方とよく似ている
ところがある。彼は“Evelyn Hope”の中でこう述べているのである。

…… God above
Is great to grant, as mighty to make,
And creates the love to reward the love.⁽¹⁸⁾

……天上の神は
創造力の偉大なるのと同様に 喜びを与え、
そして愛のつぐないに愛を創造される

彼女の心の中から湧き出して来る愛は、神の聖なる愛に支えられたもの
である。彼女は、愛の大いなる働きが、自然の偉大なわざ、つまり神の
偉大な働きを高めているのをしみじみと感じるのである。彼の純粋な愛
により、彼女の魂の中核で、神の偉大な愛につながり、生命の躍動がみ
られる愛の深い体験の表現として読むことができる。

(4)

彼女の微妙に動揺する心は、愛と拒絶の思いを交錯させながら、一歩
一歩、死の影や絶望、不安を消し去って来た過程であった。“the red wild
sparkles” から“love is fire”を体験し、彼女自から愛することの意味
を見い出したのである。第 XIV 歌は、彼女の愛の最も深い部分を知る事

Browning 夫妻の愛の詩：
Sonnets from the Portuguese と “One Word More”

が出来る意味で重要なものである。

この歌のおよその内容は次のようになる。どうしても愛して下さると言うのなら、ただ愛のためだけに愛して下さい。微笑み、顔立ち、物静かな話し方、考えが良く似ているために、楽しいやすらぎの気分になれたなどとは言わないで下さい。これらのものは、あなた次第でどうにでも変わってしまうものです。また、優しいあわれみで愛するのはやめて下さい。これはあなたの愛を失ってしまうことになってしまうのですからと述べる。ただ愛のために、私を愛して下さい。いつまでも愛して下さい。愛の永遠を通して。豊かな感受性に恵まれた彼女の求める愛の真実の姿が、最後の二行に集約されている。不安な彼女はどこまでも高い精神的な愛を心の確証として求めるのである。この愛は、V. E. フランクルが、愛への態度を三つの可能な形式に分類した第三番目の型に属するものであると言える。

愛（最狭義における）はそれが相手の人格構造のうちにも最も深く入りこみ精神的なものに到りうる限りにおいてエロティックなもの（最広義における）の最高の形式なのである。相手における精神的なものへの直接に関係することは、二人の人間の間柄というものの究極の形式を意味する。……愛は愛された人間の精神的な人格に直接に指向せしめられることである。(19)

さらにフランクルは同書の中で、愛の永遠性について述べているので引用してみたい。

もし真の愛の態度が他者の精神的な人格に向けられることであるならば、それはまた誠実に対する唯一の保証でもあるのである。したがって愛そのものから結果することは、愛が身体的時間の続く限り、すなわち生きている限り存続するということである。しかし体験時間において結果することはむしろ愛の「永遠性」の体験である。愛は永遠の相の下に体験されるのである。真に愛する者はその愛の対象へ帰依しているときの一瞬においてすら、彼の感情が変化するとはいえないのである。(20)

彼女は永遠の相の下に愛を体験することを求めているのであり、反対に彼を永遠の相のもとに愛する思いが、彼女の心の中で育まれていることを示していると言える。

(5)

第 I 歌から第 XV 歌までは、Robert の純粹な愛により、彼女の心の内奥に巢食っていた死の影や不安恐怖と戦い、「赤い火の粉」や「愛の火」を発見する過程であった。しかし、死の影と愛の狭間でもだえ苦しんでいた。その為に彼女は暗い閉ざされた狭い部屋に自己の安住の時と場を求めていたのである。

このような彼女に対して、第 XVI 歌は、決定的な方向転換をなすものである。彼女は、これを境にして、積極的に前進的に彼との現在をさらに未来を生きる方向に向かって行くのである。

彼女は、Robert が数々の障害や恐怖に打ち勝ち、ついに愛によって彼女の全てを征服したと述べるのである。彼を愛による征服者とみ、彼女を被征服者のイメージで描いている。そして彼女は“Here ends my strife” 「私の戦いはこれで終わります」(XVI, l. 12) と書き記している。彼女は、自分の病弱な体、苦悩する精神、心に巢食っている死の影、世間の冷たい目、がんこな父親と戦って来たのである。死と愛、闇と光、閉ざされた部屋と開かれた世界、貴と賤、宮廷詩人と吟遊詩人、これらの対立と生成のみごとな内的ドラマによって彼女の長く苦しい戦いは、ついに終りを迎えたのである。この愛による征服によって、彼の心と彼女の心は、最も深いところで一つとなり、相手を互いに高めあう方向に働くのである。彼女は、彼に対して、彼こそは神が選んだ偉大な詩人であり、世の人々の魂をいやしてくれる詩人であると賛美するのである。彼女は、彼に仕える為に生まれて来たものであるととらえ主と従の関係で述べている。

以後彼女は、二人の愛を高め完成させて行く方向で、さまざまな角度から愛の諸相を描いて行くのである。二人の髪の毛の交換(第 XVIII~XIX 歌)、より広い世界への意識の拡大(第 XXIV 歌)、二人の体験した愛への回想(第 XXV~XXVIII 歌)、現実を生きることへの意志(第 XXIX 歌)、Robert の愛への深い感謝(第 XLI 歌)その他に口づけや手紙、彼

Browning 夫妻の愛の詩：
Sonnets from the Portuguese と “One Word More”

女の独占欲と嫉妬心などが、美しい繊細なイメージを駆使しながら織りなされている。そして最後に、彼女は Robert への全人格的に与える愛に到達することが出来たのである。

(6)

How do I love thee? Let me count the ways.
I love thee to the depth and breadth and height
My soul can reach, when feeling out of sight
For the ends of Being and ideal Grace.
I love thee to the level of everyday's
Most quiet need, by sun and candle-light.
I love thee freely, as men strive for Right ;
I love thee purely, as they turn from Praise.
I love thee with the passion put to use
In my old griefs, and with my childhood's faith.
I love thee with a love I seemed to lose
With my lost saints,—I love thee with the breath,
Smiles, tears, of all my life!—and, if God choose,
I shall but love thee better after death.

(XLIII)

どんなにあなたを愛していることでしょうか？ その愛し方を数えてみましょう。私の魂の達する限りの深さ、広さ、高さまであなたを愛しています、
人に見えないところで 神と神の完全な恵みの極地を捜し求める時に。
太陽やろうそくのあかりにたとえられるように
日々の中でも静かななくてはならないものの程度まで あなたを愛しています。
人が正義を求めて戦うように 自由にあなたを愛しています。
人が賛辞から顔をそむけるかのように 真心からあなたを愛しています。

私が昔の悲しい時に発揮したあの情熱と 私が子供頃いだいていた信仰とをもって あなたを愛しています。

私が失った聖者とともに 見失ってしまったかに思える愛の心をもって あなたを愛しています。——私の全生涯の呼吸と微笑と涙をもって あなたを愛しています——そしてもし神がお許しになるならば、死んだ後もいっそうあなたを愛します。

第 XL III 歌は、Robert の全人格的な無償の愛に対して、彼女が全人格的に応えた与える愛なのである。彼女の内奥から自然とあふれ出るこの前進的で肯定的な愛には、彼への深い感謝と敬愛の念が現わされている。さらに注目すべきことは、Robert の生死観と同じように死後への愛も語られていることである。彼女は、ついに彼からの愛を静かに思ひめぐらし、反芻し、暖め、強い確信を抱くに到ったのである。彼女は女性特有の無意識から意識への愛の結晶作用を体験することによって、はじめて全体としてのキリスト教的な愛に達することが出来たのである。ここに於て彼女は生命の躍動を感じている。これはまさに愛の創造性と考へて良いものである。私達は、彼女が愛により死から甦り、さらに全人格的な与える愛に生きる姿に、死と愛、闇と光の対立と生成を経ながら、新たな創造的愛へ向うところに、彼女の愛と生の意義と目的を見出すことが出来る。次に取り上げる Robert の理路整然と一定の距離を保ち、客観的に意識的にロゴスの世界を構築して行く態度とは異なるのである。彼の詩の創造の精神には、対立および対立の統合と呼べる一種の弁証法が見られる。しかし、彼女の詩の世界の対比は、対象を自分の感情の中に取り入れ、解体し、生成しパトス化する流動的で植物的な情念のロゴスなのである。彼女は心を占めていた広大な情念の闇の世界に“the red wild sparkles” “an equal light” “fire” を認め、それを全人格的な創造的な与える愛にまで昇華したのである。

III R. Browning: “One Word More”—— “lights and darks”

夫人の *Sonnets from the Portuguese* に応えるために書かれた作品が、

Browning 夫妻の愛の詩：
Sonnets from the Portuguese と “One Word More”

Men and Women (1855) の巻末を飾る愛の告白詩 “One Word More” である。Robert の彼女に対する愛はいかなるものであり、彼女の心の最も奥深い所に一体何を垣間見たのであろうか。彼女は、ソネットの第 X X X I X 歌で、彼の洞察の深さを次の様に歌っている。

Because thou hast the power and own'st the grace
To look through and behind this mask of me
……,and behold my soul's true face,
The dim and weary witness of life's race,——

(X X X I X, ll. 1-5)

あなたは 私のこの仮面の裏を見抜き
……私の魂のまことの顔、人生の競争に疲れきった晴れない顔の表情を見る力を備え また雅量があるのです。

以下詩の内容を概観しながらその意味を考えてみたい。

Robert は、愛妻 Elizabeth の深い愛に応えて、50人の男女が登場する50篇の詩を書き、さらに最後に dedication として、この一篇を添えて彼女に献げたいと述べるのである。画家 Rafael は、恋人 Margherita のために絵筆によらず百篇のソネットを書き、愛の証として彼女に捧げたのである。その後、Guido Reni なる人物が Rafael の詩集を大切に秘蔵していたけれども、彼の死後それはどこかに消えてしまった。そのために、Browning 夫妻は、読みたくとも Rafael の愛のソネットを読むことが出来ないのである。詩人 Dante は、恋人 Beatrice のために、天使を描こうとしていた。しかし、彼が描いている時、地獄篇に登場する人物がそこへ乱入して来て、彼をつかまえようとしたために、描くのを断念してしまったのである。

Robert は、Elizabeth に向って Rafael の聖母マリアの絵や Dante の地獄篇に驚嘆するよりも、Rafael のソネット、Dante の絵を見たいものだと言語る。ここで、注意しておかなければならないことは、Rafael と Dante の恋人対民衆の対比である。Robert の意識の底には、民衆は画家や詩人の愛人に対する心を深く理解することが出来ないと見ているのである。そのために民衆は Rafael のソネットや Dante の天使の絵を後世

まで大切に残してはくれないのである。つまり芸術家の天賦の才能もこの現世の民衆の手にかかる、たちまち墮落し陳腐なものになり、ついには消え失せてしまうのである。彼は思いを旧約の世界へ走らせ、Moses について語るののである。岩を割り、水を出し、群衆に水と生命を与えた Moses ほどの偉大な聖人でも、不巧の聖なる神の偉業を行う瞬間に於ては、凡人のおろかさを悟り、神聖な業を汚してしまうことになったのである。Moses も神の偉業をなすよりは、Jethro の娘を愛することの方を願ったのである。Rafael、Dante、Moses と恋人達対民衆の關係は、Robert と Elizabeth との愛に於てもそのままあてはまることなのである。

画家 Rafael がソネットを書き、Dante が絵を描く意味はいったいいかなることなのか。生きて愛する芸術家なら、だれでも一生に唯一度、唯一人の恋人のために、適切で美しく簡潔なしかも充分な愛の表現法を見出そうと望まないものはいない。この時だけは、自分の天性となっている本技にたよるのではなく、他人の技術を使用するのである。つまり、芸術家としての自己を捨てて、人間本来の姿となり、人間としての喜びを保ちながら、愛の想いを表現するのである。

Robert としては、絵、彫刻、作曲を行う気持はないので、この世で彼に許された唯一の技術である詩作に頼って、彼女に一篇の詩を捧げたいと望む。彼は、心をしずめ、微細な点に精神を凝らして、他の50篇の詩とは、全く趣きの異なる作品を、登場人物の口を借りずに、“my true person” 「真実な自己」のまま、赤裸々に語りたいと主張する。

Robert は Elizabeth を表現するのに、満ち欠けする月のイメージを用いる。しかも Florence で見た三カ月が、だんだん丸くなり、London の街の上にかかっている月なのである。彼が彼女を表現する際、彼女の心のふるさとしてある英国の London を選び、その上空にかかる月を用いて、彼女の心の原風景を表現したものとされる。月は地上の民衆には、只その表面だけを見せるのである。しかし、Endymion のように、月が青年を恋し、彼を魅惑するために、あらゆる魔法を駆使するなら、月は彼にだけは、牧人、獵人、舵手、Zoroaster、Galileo さらに Keats にさえも見せなかった秘密の裏側をこっそり見せてくれるのである。この時、青年の心の目に映る月は、美しい面と恐ろしい面、船を沈めるものすごい氷塊、あるいは、Moses がシナイの山のサファイアの石だたみの上で見た、

Browning 夫妻の愛の詩：
Sonnets from the Portuguese と “One Word More”

あの天体そのもののように光り輝く光景となるのである。この宗教的で神秘的なイメージは、“Abt Vogler”に於て描かれており、詩人 Browning が人間の偉大な精神、魂の实在を説く時に用いる究極のヴィジョンなのである。

God be thanked, the meanest of his creatures
Boasts two soul-sides, one to face the world with,
One to show a woman when he loves her.

(II. 184-6)

ありがたいことに、神のあわれな人間はみせたい二つの面をもっている、
一つは世の人のため、他の一つは彼が愛する人にみせる面。

人間には、月のように世の人に見せる面と、もう一つは愛人に見せる二つの面がある。Robert が愛する彼女も、表裏二面を具えている。世の人が彼女を眺め、賛美し、知り得たと思うのは、実は彼女の半面のみなのである。彼も彼の仲間と一緒にあってほめそやした。しかし、一番良いことは、彼らから独り離れて、かすかな微光の境地を一足二足横切り、月の裏に通り抜けて行くことである。彼が裏の面に立入った時、そこに一体何を見たのであろうか。

But the best is when I glide from out them,
Cross a step or two of dubious twilight,
Come out on the other side, the novel
Silent silver lights and darks undreamed of,
Where I hush and bless myself with silence.

(II. 193-7)

しかし一番良いことは、群衆から一人しのび出て、
一歩二歩かすかな微光の領域を横切り、裏側に出ることだ、
夢想にもしなかった 未見の静かな銀色の光と闇に出くわし、
そこで私は言葉もなく喜びに胸がつまる。

そこで彼が会うものは、夢にさえ見たことのない「未知の静かな銀色の光」と「闇」なのである。ここで Robert の言う“the novel/Silent silver lights”と“darks”とはいかなる意味があるのであろうか。彼の詩の中から関連すると思われる箇所を引用して考えてみたい。Elizabeth の愛に捧げられたと思われる“My Star”に於て類似した考えが表現されている。

All that I know
Of a certain star,
Is, it can throw
(Like the angled spar)
Now a dart of red,
Now a dart of blue,
Till my friends have said
They would fain see, too,
My star that dartles the red and the blue!
Then it stops like a bird,—like a flower, hangs furl'd;
They must solace themselves with the Saturn above it.
What matter to me if their star is a world?
Mine has opened its soul to me; therefore I love it.

ある星について
私が知っていることは
(かどのある方玉石のように)
時に赤い光を
時に青い光を
放ちうるということ
赤と青とに光り輝く私の星を
私の友だちが見たいと言いだした！
すると星は鳥のように鳴きやみ——花のようにしぼんでたれさがる。
彼らはその星にまさと考えている土星で自からを慰めるべきである。
彼らの星が一つの世界をなしても、私に何の関係があろうか？

Browning 夫妻の愛の詩：
Sonnets from the Portuguese と “One Word More”

私の星は魂を開いてみせてくれる、だから私はそれを愛する。

この作品に於て注目すべき表現は、“a dart of red” と “a dart of blue” である。次に美しく若い乙女の死を歌った “Evelyn Hope” に於て考えてみると、“fire” と “dew” が指摘出来る。

The good stars met in your horoscope,
Made you of spirit, fire and dew.⁽²¹⁾

良き星が おまえの誕生に出会い、
おまえの魂を火と露から造った。

論を進めて行く上で、エーリッヒ・ノイマンが月と母権的意識について述べている文章を引用してみたい。

ここでの月の元型から月一精神として出ているのは無意識の活動と堅く結ばれた情緒的な運動である。それは活発に鳴動するときは火のような精神であり、勇気であり、激怒であり、憑依・狂乱であって、そのもたらす啓示は予言や発明やあるいは嘘言、あるいは詩を生むことになる。だが、この火のように燃え上がる生産活動とならんで、もう一つ悠然とした“節度ある”態度を取ることもあって、そのときは冥想し、夢み、じっと待ち、心に希い、ためらい、その場にとどまりつつ、想起と習得をこととして節度と聡明と分別をもたらす。⁽²²⁾

ノイマンは、表現こそ異なるけれども月の持つ二つの精神をみごとに要約している。これは、女性的精神の二面性と呼ぶことが出来るものである。

Browning は、この純化された “good moment” に於て、彼女の心の内奥に、“the novel/Silent silver lights” と “darks” を見て取り、彼女の魂の真実な二つの姿を洞察したのである。Moses がシナイ山で見た神の聖なる光に相当するものが、彼女の魂の闇の中で静かに光っていたの

である。“lights”と“darks”の働きの中に Browning は、“Love is best”, “Love is all”と自己の体験に基づいて、愛の真実を喝破することが出来たのである。

私達はさらに、対立するもの“the novel/Silent silver lights”と“darks”, “a dart of red”と“a dart of blue”, “fire”と“dew”の中に、Browning の詩人としての弁証法的な創造の原理をとらえることが出来るのである。彼は Blake のように、夜と昼、光と闇、善と悪の対立に関して、述べている。

“Night needs day, shine needs shade, so good needs evils”⁽²³⁾

夜は昼を愛し、光は影を要する、同様に善も悪を必要とする。

これは、N. O. ブラウンが、「エロスとタナトス」の中で、ロマン派の偉大なヴァジョンについて述べているものと深く関係しているのである。

……ロマン派の偉大なヴィジョンの一つは、人類の歴史が、人間自身と自然との原初の未分化の統合の状態から出発し、自然からの分化と対立（疎外）の間で人間の力が発展する中間期を経て、最終的に、調和またはより高い次元における統合に戻るという構成である。⁽²⁴⁾

原初の未分化統合、対立による分化、最終的調和は、Browning が処女作から一貫して追求した中心主題である。彼は、ロマン派の精神を深いところで受け継いでいることが認められる。Browning の対立による分化、最終的な調和は、現実の悪や醜くさを無視したものではない。Dallas Kenmare は *Browning and Modern Thought* の中でこのことについて巧みに述べている。

The fact that Browning was the great poet of human life, second in this only to Shakespeare, accounts for the realism, ugliness and obscurity in his work, because clearly human life includes all this: there are shallows as well as depths, often it is hideous,

Browning 夫妻の愛の詩：
Sonnets from the Portuguese と “One Word More”

cruel and crude, certainly darkly obscure, confusing and enigmatic. Browning was a relentless realist. …because he was a profoundly religious man, he feared no aspect of truth, and recorded his perceptions of evil and sin as honestly as his intuitions of beauty.⁽²⁵⁾

ブラウニングが、シェイクスピアに次いで、人生の偉大な詩人であったと言う事実からして、彼の作品には、写実、醜さと不明確さがあるのがわかる。なぜから、人生にはこれらすべてが含まれているのである。すなわち、深海もあれば浅瀬もあり、時々、人生は見るも恐ろしく、残酷で露骨であり、確かに、ほんやりとしていて、あいまいで混乱し謎のように解きたいのである。ブラウニングは、冷酷な写実主義者である。……彼は深遠な宗教的人間であったので、真実のいかなる面をも恐れなかったし、彼の悪や罪の知覚を彼の美の直観と同様に直面目に記録したのであった。

彼がめざすものの思想が「塔の思想」の中でマグダ・レヴェツ・アレクサンダーによって述べられているゴシック的な建築の世界に似ているのである。つまり彼の詩に於る思想の発展は、“from darkness to light, ugliness to beauty, triviality to profundity”⁽²⁶⁾（「闇から光、醜さから美しさ、つまらないことから深遠なこと」への巨大な詩的建築なのである。

IV おわりに

私達は、二つの愛の詩 *Sonnets from the Portuguese* と “One Word More”を通して、Elizabeth と Robert の愛の特質について考えてきたのである。一般的に二人の愛は、キリスト教的な知的精神に支えられた魂と魂の感応であり、融合であり、優しさと思いやりと感謝の念に満ちた創造的なものであると言える。一度詩の世界に入り込んでみると、彼女の詩に表現された愛の世界は、Robert と異なり、即物的であり大地的であり、永遠の愛を求めつつも、観念的な理想の愛の世界へ高く飛翔して

行くことはない。彼を星や月にたとえることはしない。常に現実や大地と深く関わり、水のごとく流動し理性よりは情動に突き動かされている面が強いのである。彼女にとって愛は火であり、死を超克し生きる力や喜びを与えてくれる創造の源泉である。一方 Robert は、*Men and Women* に於て、多様な愛の姿を劇的独白でもって、具体的に現実的に表現している。しかし、彼の詩の精神は、広義の愛の世界の中で、美と醜、聖と俗、愛と憎しみの対立を通してより高い段階での統合を追求して行くのである。“One Word More” や “My Star” でも理解されるように、高い神聖な愛の極地へ向って Shelley のごとく激しく飛翔して行くのである。

現実のあるがままの Elizabeth の姿を描写するのではなく、抽象化して星や月の宇宙的な物の中に彼女を取り入れてしまうのである。J. Donne の恋愛詩の恋人に実体が希薄であるのと同様に、想像の世界で純化し美化し聖化して、宇宙の根源に返してしまうのである。W. Wordsworth が“Lucy Poems”に於て死んだ Lucy を地球の自転の中に取り組んだのと同じように、J. Keats が “Bright Star” に於て恋人 Fanny Brawne を不滅の星に聖化したように、Robert の心の中でも同様な愛の聖化作用が行なわれたものと思われる。その時はじめて Elizabeth は、Robert に取って永遠にして不滅の愛の vision になることが出来るのである。

[注]

- (1) E. B. Browning, “Lady Geraldine’s Courtship”, ll. 161-4.
- (2) *The Letters of Robert Browning and Elizabeth Barrett* Vol. I., Harper & Brothers, p. 1.
- (3) G. K. Chesterton, *Robert Browning*, St Martin’s Press, 1967, p. 59.
- (4) *Ibid.*, p. 58.
- (5) *Ibid.*, p. 59.
- (6) *Complete Works of Elizabeth Barrett Browning*, Vol. 3., AMS Press, 1973, pp. 391-2.
- (7) *Ibid.*, p. xi.
- (8) *Ibid.*, p. 392.
- (9) *Ibid.*, p. 392.
- (10) P. B. Shelley, *Alastor*, ll. 304-5.

Browning 夫妻の愛の詩：
Sonnets from the Portuguese と “One Word More”

- (1) R. Browning, *Pauline*, ll. 99-100.
- (12) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, North-Holland Publishing Company, 1974, “bat” と “owl” の項参照。
- (13) E. B. Browning, “To Flush, My Dog”, ll. 38-42.
- (14) Betty Miller, *Robert Browning A Portrait*, John Murray, 1952, p. 77.
- (15) *Dictionary of Symbols and Imagery*, “red” の項参照。
- (16) R. Browning, “Love among the Ruins”, l. 84.
- (17) R. Browning, *Fifine at the Fair*, Epilogue, l. 32.
- (18) R. Browning, “Evelyn Hope”, ll. 25-7.
- (19) 「死と愛」, V. E. フランクル著 霜山徳爾訳, みすず書房, 1985年, pp. 148.
- (20) *Ibid.*, p. 160.
- (21) “Evelyn Hope”, ll. 19-20.
- (22) 「女性の深層」, エーリッヒ・イノマン著, 松代洋一 鎌田輝男訳, 紀伊國屋書店, 1980年, p. 96.
- (23) R. Browning, *With Francis Furini*, ll. 484-5.
- (24) 「エロスとタナトス」, N. O. ブラウン著, 秋山さと子訳, 竹内書店新社, 1975年, p. 95.
- (25) Dallas Kenmare, *Browning and Modern Thought*, Haskell House Publishers Ltd., 1939, p. 15.
- (26) *Ibid.*, p. 17.